

# メスメリズムの文化史

基礎教育学コース・日本学術振興会特別研究員PD 奥村大介

Cultural History of Mesmerism

Daisuke OKUMURA

Mesmerism or animal magnetism, which a German-born heterodox physician, Franz Anton Mesmer (1734-1815) founded, was the therapy by so called “magnetic fluid”. Since nineteenth century, people have become suspicious of the existence of magnetic fluid and mesmerism’s *medical* efficacy. But afterward, mesmerism continued to have important effects on the *cultural* history from the era down to modern times, for instance in the fields of opera, ballet, literature, paintings, social thought, psychoanalysis, alternative medicine, etc. This paper discusses the cultural morphology of mesmerism and mesmeric representations from W. A. Mozart to Kurosawa Kiyoshi, a cineaste in modern Japan.

## 目次

はじめに

### 1 メスメリズムの輪郭

#### A 理論と治療

#### B メスメリズムの背景

#### C 医術としてのメスメリズム——流行と凋落

### 2 文化史のなかのメスメリズム

#### A 磁力という表象

#### B 磁化された薔薇——ゴーチエのバレエ『ジェンマ』(1854年)

#### C 夜を往く女——ブラウニングの詩『メスメリズム』(1855年)

#### D 遠隔か近接か

#### E フランクリンと<sup>アルモニカ</sup>〈調和〉という名の楽器

### 3 メスメリズムの消息

#### A ヴィルヘルム・ライヒ

#### B 日本のメスメリズム

結びにかえて

…磁石はまことその昔の隕石時代の思い出を  
この地上の世界にまで保ち続けているように思われる。

ツヴェイク『精神による治療』(高橋義夫訳)

はじめに

ドイツに生まれ主としてパリで活躍した医師メスメル (Franz Anton Mesmer, Frédéric-Antoine Mesmer, 1734-1815)

が18世紀末に行なった動物磁気治療術 (メスメリズム *le mesmerisme*) は、宇宙にあまねく拡がる不可視にして不可秤量の磁気流体をコントロールし、人体内部のこの流体の流れを整えることで、心身の疾患を治療するという医術である。今日では、一種の催眠術であったと考えられるこの治療術は、18世紀末から19世紀前半にかけて欧州各地そして新大陸をも席卷する一大流行となった。医術としてのメスメリズムは、フランス科学アカデミーなどの批判的調査を受けて疑問視する声が高まり、やがて衰退するにいたるが、その後も文学、哲学、政治思想、宗教思想など広範な文化領域に影響を与え続け、その流れは現代にまで続いている。

## 1 メスメリズムの輪郭

### A 理論と治療

メスメルの『動物磁気発見のいきさつ』(1779年)<sup>1)</sup>の理論的中心部分から、メスメリズムの概略をみてみよう。彼によれば、星辰・地球・生物は宇宙にあまねく拡がる流体によって相互に作用を及ぼし合っている。この流体は、いかなる物体も媒介とせず、離れたものの間に働く。この流体の作用を人体に用いれば、神経の症状は直接治癒され、他の症状は間接的に治癒される。動物体内にある流体は動物磁気 (*le magnétisme animal*) である。動物磁気の治療効果は、患者に発作=分利を引き起こすことで生じる——。

メスメリズムによる治療実践にはさまざまな方法があったが、基本的な形は次のようなものであった。施

術者（メスメルまたはその弟子たち）は患者の前に膝が触れあうぐらいの距離で座る。両手で患者の両方の親指をさわり、患者の眼を見つめる。施術者は患者の肩から腕に沿って手を動かす。それから患者の鳩尾あたりを押す。多くの患者たちは温感であったり刺激であったり何らかの感覚を覚え、やがて発作＝分利を起こす。それは痙攣であったり、ときに失神にいたりする。治療の最後にはアルモニカという楽器（後述）で音楽を聞かせることもあった。基本的に患者の身体に触れるわけだが、必ずしも完全に接触する必要はない。ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）は『エンツクロペディー』第三部「精神哲学」（初版1817年、第三版1830年）のなかで、メスメリズムを磁気催眠にとらえた上で次のように述べている。「磁気術師がどんなふうに作業するかを示す様式は、とくに撫でることである。けれどもここでいう撫でるということは何ら実際に接触することである必要はなく、撫でる際に磁気術師の手が磁気をかけられる人の身体から、ひよっとすると一インチ離れたままになっていても磁気作用が起きることができる」<sup>2)</sup>。あるいはメスメルの古典的な伝記の一つであるツヴァイク（Stefan Zweig, 1881-1942）の『精神による治療』（1931年）には、「メスメル先生はこの頃治療を行なう場合にたいいてい磁石のような器具をいっさい用いず、ただ病める場所を時には間接に時には直接に手で触れるだけですましている」という或る患者の1776年の証言が記載されている<sup>3)</sup> [図1]。

## B メスメリズムの背景

メスメリズムの中心にある〈磁気流体〉という表象と、〈離在の物体間に働く作用〉という概念には、源流がある。それは第一に〈魔術的な医術〉として、第二に〈物理的な治療術〉として、ルネサンスから初期近代にかけての科学思想史上に二重の像を結ぶ。

魔術的な医術としてメスメルに先行するのは、精神医学者・医学史家エランベルジェ（エレンベルガー）によれば、パラケルスス（Paracelse, 1493/94-1541）やファン・ヘルモント（Jan Baptista van Helmont, 1579-1644）らの医化学派、そしてキルヒャー（Athanasius Kircher, 1601-80）の磁気哲学である。これらは——それぞれ微妙な違いはあるが大まかに言えば——磁石が鉄を引き付ける作用に神秘的な力を見出すものであった<sup>4)</sup>。さらに、ケプラー（Johannes Kepler, 1571-1630）やニュートン（Isaac Newton, 1642-1727）の引力概念もそこには流入している<sup>5)</sup>。



図1 メスメリズムの施術（18世紀の図版）

そして、今日では催眠術と解されるメスメリズムの手技がメスメルと同時代の祓魔師（*l'exorciste*）<sup>ふっまし</sup>、ガスナー（Johann Joseph Gassner, 1727-79）の影響下にあることも、すでに当時から指摘されていたという<sup>6)</sup>。すなわち、磁石のもつ神秘的な牽引力、天体相互の間に働く引力の作用といった遠隔作用の概念、祓魔術の技法がメスメリズムの魔術的な源泉である。

物理的な治療術としては、メスメルの同時代に、すでにイングランドの一部の医師が（治療哲学としての磁力ないし引力概念ではなく）実際に磁石を使って病気の治療を行なっていることをエランベルジェが指摘している<sup>7)</sup>。また、ドイツのクライスト（Edwald Georg [auch Jürgen] von Kleist, 1700-48）とオランダのミュッセンブルーク（Pieter van Musschenbroek, 1692-1761）が1745-46年にそれぞれ独立に発明した蓄電器（ライデン瓶）を用いた電気治療がメスメルの当時、すでに行なわれていた [図2]。メスメリズムと電気治療のあいだには、そこで治療効果をもつとされた流体（*les fluides*）に磁気と電気という違いがあるが、両者の作用は19世紀にいたるまで、必ずしも明確に分節化されていたわけではない。1820年のエルステッド（Hans Christian Ørsted, 1777-1851）による電流の磁気作用の発見、さらに1832年のファラデー（Michael

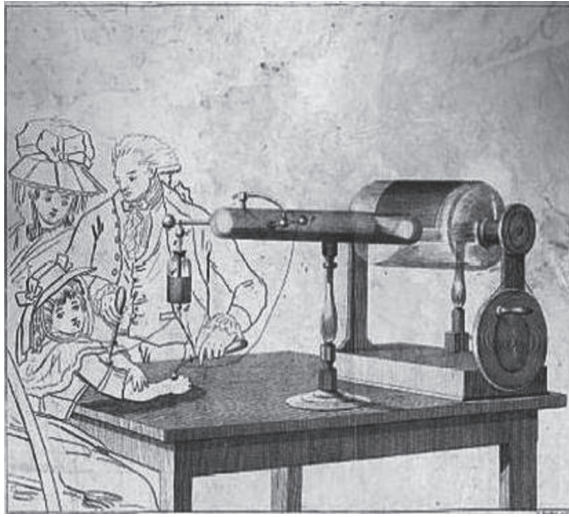


図2 初期の電気治療（18世紀の図版）

Faraday, 1791-1867) による電磁誘導現象の発見を俟って、電気と磁気の関係はようやく解明されたのであり、それ以前、電気と磁気は見かけ上〈離れたものの間に働く力〉としてしばしば混同されてきた。

メスメリズムのような奇妙な治療術が多くの人々に受け入れられた歴史的な背景としては、当時ニュートンの万有引力論が1730年代にヴォルテール (Voltaire, 1694-1778) によってフランスに導入された直後であり<sup>8)</sup>、フランクリンによる雷の電気説の提唱ならびに避雷針の発明 (1752-53年)、そしてモンゴルフィエ兄弟 (Joseph Michel Montgolfier, 1740-1810; Jacques Étienne Montgolfier, 1745-1799) による気球の発明 (1783年) などが相次いで、「メスメルの説く眼に見えない流体は、これらに比べて、さほど驚くには当たらないもののように思われ」<sup>9)</sup> たということが指摘できる。

### C 医術としてのメスメリズム——流行と凋落

メスメリズムは「フランス大革命に先立つ10年間に、測りしれぬほどの関心を集めた」<sup>10)</sup>。メスメルの一派は調和協会 (Société de l'Harmonie) なる結社をつくって、メスメリズムの普及をはかり、この活動は順調に成果をあげる。会員には著名な官僚、法律家、医師、貴族らが名を連ね、そのなかにはラファイエット侯爵 (Marquis de Lafayette, 1757-1834) の名もあった。そしてこの協会は、フランス大革命へと至る政治的急進思想を育む秘密結社のような役割をも果たす。1784年、このメスメリズム熱を看過できなくなったルイー六世

(Louis XVI, 1754-1793) は王立科学アカデミーならびに王立医学アカデミーの会員からなる審査委員会、さらに王立協会からなる調査委員会を発足させる。両委員会の結論は「〈磁気流体〉なるものの物理的に存在する証拠は全くみつからなかった」というものであった。そして、それは想像力 (l'imagination) の作用と結論づけられた<sup>11)</sup>。以後、メスメリズム批判の著作が次々と刊行されるようになる。さらに同年、プロイセンのハインリッヒ大公 (フリードリッヒ大王の弟) の前でメスメルが行なった治療実演が失敗に終わり、メスメルは激しく落胆する。翌1785年の初頭メスメルはパリを去り、歴史の表舞台から姿を消した<sup>12)</sup>。メスメルが消息を絶つのと相前後して、弟子のピュイゼギュール侯爵 (Amand-Marie-Jacques de Chastenay, Marquis de Puységur, 1751-1825) は動物磁気治療術を〈磁気睡眠〉(磁気による眠り le sommeil magnétique) と捉えるようになる。そしてこの概念は後の〈催眠〉(l'hypnotisme) 概念へとつながるものであり、実体的な磁気流体の作用としてのメスメリズムあるいは動物磁気概念は医学史の後景へと退くことになる<sup>13)</sup>。

## 2 文化史のなかのメスメリズム

### A 磁力という表象

だが、動物磁気の流体は医学史の領野から〈消磁〉されるも、文化の各領域へと流入し、18世紀後半から19世紀にかけての文化のなかで、依然、不可視の力を保ち続ける。メスメルが活躍していたころから、メスメリズムは文化史のなかに多くの倍音を響かせている。メスメルは裕福なヴィーン時代、モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) のパトロンであった。モーツァルト晩年のオペラ・ブッフア『コジ・ファン・トゥッテ』(Cosi fan tutte, K.588, 1790年作曲・初演)<sup>14)</sup> では、狂言自殺をはかった二人の若者を医師に扮した女中デスピーナ (Despina) がメスメリズムで救命する(という芝居を打つ)場面がある。デスピーナのレチタティーヴォを引こう。

Questo è quel pezzo di calamita pietra Mesmerica, ch'ebbe l'origine nell'Alemagna, che poi si celebre là in Francia fu. くれこそはあの磁石の一部 メスメル石ですよ、ドイツに生まれその後有名になったのは かの地フランス。<sup>15)</sup>

さらに、メスメル磁気流体は19世紀ロマン派の



文化のなかに浸透する。「メスメリズムは、その最初の段階においては、啓蒙主義にみられるような極端な理性信仰を表明していた。いわば野放しの啓蒙主義というべきものであったが、後に、ロマン主義の形態のもとに、まったく正反対の極に向かう運動を誘発することになる」<sup>16)</sup>。E・T・A・ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822), バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850), パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822), ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864), ポオ (Edgar Allan Poe, 1809-1849) など19世紀の文学のなかにメスメリズムの痕跡を見出すことは容易い。バルザックの短篇『ことづけ』(Le Message, 1833) には「説明できない磁力のような魅力 (attraction magnétique)」<sup>17)</sup> といった表現があり、シェリーは「磁石のように引きつけ合う恋人たちの眼 (Magnet-like, of lovers' eyes)」<sup>18)</sup> という詩行を『鎖を解かれたプロメテウス』(1820年) のなかに書きつけている。

文化史、とくに文学史におけるメスメリズムについては、タタールの『魔の眼に魅されて』(1978年) などに詳しい<sup>19)</sup>。ここでは、タタールらの落ち穂拾いとして、二つの印象的な例を見ておこう。

## B 磁化された薔薇——ゴーチエのパレエ『ジェンマ』(1854年)

まず、舞台芸術では、ロマン主義のパレエに印象深い作品がある。テオフィル・ゴーチエ (Théophile Gautier, 1811-1872) の台本になる二幕五場のパレエ『ジェンマ』<sup>20)</sup> である。音楽はガブリエッリ伯爵 (M. le comte Gabrielli), 振付はチェッリート夫人 (M<sup>me</sup> Cerrito), 1854年5月31日、帝立音楽アカデミー (l'Académie Impériale de Musique) で初演された。今日では上演される機会が少なく、実際の舞台を分析対象とすることは難しい。ここでは初版台本を材料に、メスメリズムの現われを見てみよう。

パレエ『ジェンマ』の舞台は17世紀初頭のナポリ王国である<sup>21)</sup>。そして、登場人物にはサンタ＝クロッチェ (Santa-Croce) という男がおり、台本の配役には「磁気催眠術師 (magnétiseur)」と記されている。本文では侯爵 (le marquis) と書かれるこの人物は、動物磁気催眠術の使い手なのである。「錬金術 (l'alchimie) と神秘学によって財産の埋め合わせをしようとしている、放蕩者の浪費家だ。錬金術の研究 (travaux hermétiques) をしているうちに、彼は磁気催眠術 (magnétisme) の秘密を再発見したが、それはか

つて錬金術の達人たちに知られていたもので、後にメスメルがその大司祭になるであろう」<sup>22)</sup>。主人公の若き女伯爵ジェンマ (comtesse Gemma) は彼女の寄宿学校卒業を祝う舞踏会を控え、当日身につけるドレスの試着に余念がない。彼女は肖像画家のマッシモ (Massimo) に好意をもっているが、サンタ＝クロッチェ侯爵はこの美しい女公爵の愛を我がものにすべく奸策を練る。彼女に磁気催眠をかけ、彼女を自分と結婚させようというわけである。侯爵はジェンマの閨房に忍び込む。「物音が聞こえず、ジェンマが一人だと思ったサンタ＝クロッチェ侯爵は戻り、彼女が肘掛椅子の上に倒れ込んでいるのを見て、両手を彼女の方に伸ばし、手業をする。抗しがたいこの作用に屈して、ジェンマは、眠ったまま、もはや自由意思はなく、蛇に竦んだ鳥のように、よろめきながら立ち上がる。彼女は、あらゆる恋情の身振りをしながら、サンタ＝クロッチェの周りを廻る。彼女は愛情を込めて彼の方に身を屈め、腕を絡ませる。なぜならそれが磁気催眠術師の意志であるからだ」<sup>23)</sup>。サンタ＝クロッチェ侯爵が術を解くと、彼女は催眠下の出来事を何も覚えていない。「それは磁気による眠り (le sommeil magnétique) の中で生じたのであるから」<sup>24)</sup>。

ここでこのパレエ台本の執筆時期と作品の物語現在を思い出してみよう。初演ならびに台本出版は1854年であるから、執筆は同年かその数年前以内であろう。物語現在は17世紀初頭であった。前章で述べたとおり、1785年にはメスメルがパリを去ったのち、弟子のピュイゼギュール侯爵がメスメリズムを捉えた言葉が、まさに〈磁気による眠り〉(le sommeil magnétique) であった。また、ゴーチエの台本によれば、サンタ＝クロッチェ侯爵が用いる術はもともと錬金術の系譜のなかで受け継がれてきたものであるという。おそらく、ここで念頭に置かれているのは後述するルネサンス期の医師・錬金術師パラケルススの磁気治療であろう。ただ、パラケルスス一派の磁気治療は作中のサンタ＝クロッチェ侯爵が施す技とはかなり異なるもので、やはり明確にメスメリズムの手技を思わせるものであるから、物語現在の17世紀初頭においては——ことに〈磁気による眠り〉などという表現は——いわばアナクロニズムである。むろんそのことは、このパレエの価値を貶下するものではない。

ふたたび物語に戻る。サンタ＝クロッチェはジェンマの眠りを解き、隠し扉から素早く身を消すと、肖像画家マッシモが到着する。彼はジェンマの肖像画を描いており、この日、仕上げにやってきたのだ。マッシ

モが絵筆を走らせていると、ジェンマは次第にモデルの役割を忘れ、画家の肩にもたれ掛かる。芸術家は、彼女の美しさに動揺する。そこに、サンタ＝クローチェ侯爵の再訪が告げられる。侯爵は目覚めたジェンマが自分をいかに迎えるか、知りたかったのである。その結果は明白であった。「磁気催眠ではありふれた対照の効果によって、若き女伯爵は、眠った彼女が愛する男に対して、覚醒状態では、極度の嫌悪を感じる」<sup>25)</sup>。彼女は侯爵の差し出した薔薇を蔑んで床に落とす。だが、それでもサンタ＝クローチェ侯爵は、ジェンマの後見人によって、舞踏会に招待されることになる。「一瞬、一人きりになったサンタ＝クローチェは侮られた薔薇を拾い、それを磁化する (magnétise)。彼が開いた花芯の中に自分の意思と欲望を移入し、その花にジェンマを魅了する力を与えると、確かに、彼女は間もなく、爪先立ちで、両腕を伸ばしながら戻り、薔薇の方に進んで、その香りをうっとりとし吸い込み、それを胴着に挟む」<sup>26)</sup>。

磁化された薔薇の花はタリスマンとなる。タリスマン (le talisman) とは護符の謂で、魔力を付与された物体のことである。本来タリスマンはそれを身につける者を超自然的な力で守護するものだが、この薔薇はサンタ＝クローチェの欲望を満たすために邪悪な力を与えられたタリスマンである。なお、薔薇を「磁化する (magnétiser)」という表現は、メスメリズムの文書にしばしば見られる言い回しであり、メスメリストは直接人体に動物磁気を与えるのみならず、さまざまな物体を磁化し、治療のために用いた。メスメル術によって「磁化する」ことは、「メスメル化する」 (mesmérise) という動詞でも言いあらわされた。もともとタリスマンは星辰の力が付与され霊力をもつものであり、神聖な文字や符号を宝石や金属に刻み込んだり書き記したりして作るのが一般的である。それがこのパレエではメスメリズムに特有の、物体を磁化＝メスメル化する手続きとして再現されているのである。17世紀初頭という物語現在と、19世紀半ばという執筆時期。その中間の時期にメスメリズムが隆盛したことが、このような奇妙な描写を生んでいる。

さて、いよいよジェンマの舞踏会が開かれる。彼女は「磁化された」薔薇を身につけている。薔薇の霊力により、サンタ＝クローチェは彼女に好意的に迎えられる。画家マッシモはこの花を見つけ、彼女にそれを捨てるように迫る。「真実の愛の力に折れたジェンマは、墮落のタリスマン (le talisman corrupteur) を若き芸術家に差し出し、再び自分を取り戻して、友達や

マッシモと一緒に踊る」<sup>27)</sup>。だが、サンタ＝クローチェは諦めない。自分と踊るようにジェンマに求め、彼女が疲れたふりをして踊りの間を出て行くと、こんどはタリスマンの力を借りることなく「意思を集中し、頭の中で、舞踊の間に再び現われるように乙女に命じる」<sup>28)</sup>。すると驚くことに彼女は侯爵の思うままに引き返してくる。そして「ヴァルスを交えて、サンタ＝クローチェによって導かれた催眠術の踊り (un pas magnétique) が踊られて、彼はジェンマの動作と意思を完全に支配し、彼女は従順な影のように彼に従う」<sup>29)</sup>。ほどなくして女伯爵はサンタ＝クローチェの手下たちによって攫われ、彼の隠れ家の荒れ果てた実験室に幽閉された。「夢遊病の眠り (le sommeil somnambulique) に落ちたジェンマは花嫁衣装を身に纏っている」<sup>30)</sup>。このあと、邪な催眠術師は自らの支配力を試すため、あえてジェンマを目覚めさせる。そして目覚めた女伯爵と争い、彼女は窓から脱出する。やがて若き肖像画家と結婚し大団円でこのパレエは終わる――。

ここで注目したいのは、磁気催眠にかけられたジェンマが「夢遊病の眠り」に落ちていると書かれていることである。別の箇所ではジェンマは「夢遊病の婚約者 (fiancée somnambulique)」とも呼ばれている<sup>31)</sup>。夢遊病 (le somnambulisme) という言葉はヨーロッパ語でかなり古くから用いられており、ラテン語でも somnambulismus という語形で用いられる。近代語で確認しうる用例としては、すでに1765年にはディドロ (Denis Diderot, 1713-1784) とダランベール (Jean Le Rond d'Alembert, 1717-1783) の編纂になる『百科全書』<sup>32)</sup> 第15巻に項目「夢遊病の、夢遊病 (SOMNAMBULE, & SOMNAMBULISME)」が設けられている。夢遊病という言葉こそ直接は使われていないが、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『マクベス』 (Macbeth, 1606 ca) 第五幕では、マクベス夫人の夢遊病めいた行動が描かれる。あるいは、ヴィンチェンツォ・ベッリーニ (Vincenzo Bellini, 1801-1835) に『夢遊病の女』 (La sonnambula) というオペラがあることもよく知られている。これは1831年初演である。1854年のパレエ作品『ジェンマ』で、磁気催眠下にある人と夢遊病とが同一視されたことは興味深い。少し時代を遡って、夢や催眠現象を多く論じた自然哲学者ゴットヒルフ・ハインリッヒ・フォン・シュューベルト (Gotthilf Heinrich von Schubert, 1780-1860) の著作、たとえば『自然科学の夜の側面をめぐる論攷』 (1808年)<sup>33)</sup> の第13講では、夢遊病とメスメリズムは明確には弁別されていない。だが、『ジェンマ』の初演と同じ頃、すなわち1850年代の米国では女

性の夢遊病の治療にメスメリズムが用いられた記録がある<sup>34)</sup>。催眠現象と夢遊病の分節化は19世紀の半ばころに、漸進的に生じたとみることができる。だが、ここではそのような概念史的把握が主たる目的ではない。むしろ注目したいのは、〈夢見ながら夜をさまよう女性〉という形象である。

夢遊病は〈女性の病〉であった。それは実際の患者の男女比率という疫学とはさほど関係なく、非主体性、受動性、被催眠性といった量囲とともに19世紀的なジェンダー規範の一部をなす「隠喩としての病」(スーザン・ソントグ)である。さらに、夢遊病<sup>ラポール</sup>と催眠下の女性の類似性によって、メスメリズムの関係においては、しばしば施術者は男性、被施術者は女性というステレオタイプが形成される。そこから〈催眠下の女性〉(夢遊病の女性)は19世紀文学のなかで無視すべからざるテーマとなる。それはポオ的な意味における〈眠る女〉の変奏ともいえよう<sup>35)</sup>。次節では眠りながら歩く女性が描かれる、その名も『メスメリズム』という題をもつ英詩を読み解いてみよう。

### C 夜を往く女——ブラウニングの詩『メスメリズム』(1855年)

メスメリズムと夢遊病の交錯は、ロバート・ブラウニング(Robert Browning, 1812-1889)の詩『メスメリズム』(*Mesmerism*, 1855)<sup>36)</sup>に端的に現われている。これは深更、一人のメスメリストが女性を千里眼のごとく幻視し、さらにはその女性を催眠によって、実際に自分の家に呼び出すという筋立てである。27の連から成るこの詩は、表題に「メスメリズム」を掲げた珍しい作品で、全篇訳出して注釈するに値するが、ここでは紙幅の制限から一部のみを——ときにきわめて晦渋な表現があるため原文を掲げて——紹介するとどめよう。この詩はメスメリズムを身につけた者のファウスト的な告白から始まる。

All I believe is true!  
I am able yet  
All I want, to get  
By a method as strange as new;  
Dare I trust the same to you?  
わが信ずるは悉く真なり!  
われは<sup>のぞ</sup>希める全てを  
新奇なる術をもちて  
手中に収めんとす  
汝に同じ術を託す能わんや [一]<sup>37)</sup>

語り手の<sup>メスメリスト</sup>催眠術師は、ゴシック小説めいた不気味な屋敷に暮らしている。閉ざされた扉を奇怪な虫がつつき、猫が用水桶のなかに忍び込んでいる。燭台の焰が揺れ、階段には不気味な足音。いつの間にか錠は解かれ、部屋のなかのテーブルには蜘蛛が糸を垂らして降りてくる。

If since eve drew in, I say,  
I have sat and brought  
(So to speak) my thought  
To bear on the woman away,  
Till I felt my hair turn gray—  
もし 日暮れより  
座して黙考するは  
遥けき女のこと  
(云うなれば) わが想い  
わが髪に白きもの混じりたるかに覚ゆるまで  
—— [五]

彼が思うのは遥か遠くにある女性である。彼女の姿を思いうかべる。

Till I seemed to have and hold,  
In the vacancy  
'Twixt the wall and me  
From the hair-plait's chestnut-gold  
To the foot in its muslin fold—  
壁とわれとの間に 虚空にて  
編み込まれたる髪 栗色に似たる黄金色  
足先は<sup>モスリン</sup>毛織にて包まれたるを  
われ 捉えたりと覚えしまでに—— [六]

彼女の姿は幻影となり、虚空に映じる。それは写真術(the calotypist's skill)のごとくに明然と浮かびあがる。さらにメスメリストはこの幻に満足せず、彼方にいる女の魂に念ずる。ここに来てくれ! すると驚くことに、その念は遥か遠くの彼女に届く。いな、むしろ、メスメリストの思念が女を遠隔操作するというべきか。

Out of doors into the night!  
On to the maze  
Of the wild wood-ways,  
Not turning to left or right  
From the pathway, blind with sight—  
屋敷より出で、夜を往け!



迷路なす  
森の道を抜け  
脇目も振らず ひたすらに  
闇に盲めしいようとも—— [一七]

風雨のなか、木立の間を縫って、闇を抜け、彼女は催眠術師のもとに走る。彼は磁気催眠術の正しい動作 (a gesture due) を続ける——彼女の唇に出会うことを夢想しつつ。幻影のなかの女の髪が生气を受け (made alive), 虚空に拡がる。やがて——

‘Now—now’ —the door is heard!  
Hark, the stairs! and near—  
Nearer—and here—  
‘Now!’ and, at call the third,  
She enters without a word.  
「いま——いま」——扉の音 聞こゆ  
聞け 階段なり! 近づきたり  
近く——此処へ——  
「いま!」 三度 扉を叩き  
女は無言にて入り来たり。[二四]

そしてここで、奇妙な現象が起こる。催眠術師が幻視した彼女の姿は、部屋のなかにそのまま残っている。そしてやってきた生身の女が幻影の女と重なるのだ。ここには近縁の表象圏にある催眠、夢遊病、さらに分身ドッペルゲンガーのテーマが重層化されている。あたかもメスメリズムによって魂だけが催眠術師のもとに先に出現し、それを肉体が追いかけて夜の森を歩いてきたといわんばかりである。おもえばドイツ語の der Doppelgänger は「二重の一行く人」の謂であった。なお、このテキストの書かれた時代前後には、分身のテーマは文化史上に無数に現われる。英国の詩人・画家、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882) に『手と魂』(Hand and Soul, 1850) という自己幻視像をテーマとした短篇があり、あるいはフランツ・シューベルト (Franz Peter Schubert, 1797-1828) の歌曲集『白鳥の歌』(Schwanengesang, D.957/965a) にはハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856) 作詞による「分身」(Der Doppelgänger, 1828) という歌曲が収められている<sup>38)</sup>。そして夜を往く夢遊病の女の姿は、たとえばジョン・エヴァレット・ミレー (John Everett Millais, 1829-1896) の《夢遊病者》(The Somnambulist, 1871) [図3] など、18世紀末から19世紀末にかけて、多くの絵

画に現われる。この時代、「夢遊病患者」という類の題が与えられた絵画において、ほとんどの場合そこに描かれているのは女性である<sup>39)</sup>。

さて、ブラウニングの詩は、最後の二つの連で、催眠術師が神に祈り、自らの磁気催眠術を抑止してほしいと願う。そして、自らにはいつの日か、この秘術を行使した代償 (price) がのしかかるか、そしてそれがいかなる代償であるか、誰ぞ知るや (who can say?) と結ばれる。

啓蒙リュミエール=光の世紀に生まれた奇妙な新医療であったメスメリズムはヴィクトリア朝時代の詩のなかで、神への背信めいた技として、ファウスト的な人物によって施される秘術となった。そこには、かつてメスメルが観客を集めて実演したような発作=分離の様子、しばしば戯画・風刺の対象ともなった、胡散臭くもどこかしら滑稽さをともなった様子はいささかも見られない。そして、それはもはや医療ではない。それどころ



図3 J. E. ミレー 《夢遊病者》(1871年)

か、夢遊病、夢中歩行 (sleepwalking) という病的現象さえ生じさせた。そこにあるのは、神祕領域の侵犯者というファウスト的なメスメリストによって行なわれ、超自然的な幻視や遊魂現象を思わせる幻想的メスメリズム、そして暗鬱な空間に展開されるゴシック的と呼ぶべきメスメリズムである。

#### D 遠隔か近接か

さて、ここでメスメリズムと距離の問題を考えてみたい。メスメルは動物磁気治療の施術に際して、磁石や鉄の棒を患者の身体に触れさせたり、自らの手で患者に触れたりして、動物磁気の流れを整えたという。患者は施術を受けるとクリーズ (発作・分利) を起こし、ときに失神する。そして、施術を繰り返すうちに、病気の症状は消えたという。だが、メスメルが実際に手や器具で患者の体に触れなくとも、彼が近づきだけで、あるいは手をかざすだけで、メスメルの体から放出された動物磁気は患者の動物磁気と共鳴し、これを整流しえたとする記録もあることはすでに確認した。メスメルの磁気流体は、接触によって伝わるのか、離れていても伝わるのか。メスメルは動物磁気を宇宙に充満するエネルギーのようなものと考えていたので、天体と天体、あるいは天体と人体との間でも作用が伝わる。したがって、接触は本質的に必要な条件ではない。ちょうど電気が導体を通じて伝わりもするが、雷のような放電現象として絶縁された物体の間をも通じるように、離れたものの間にも動物磁気は伝わる。動物磁気は近接作用なのか遠隔作用なのか。

遠隔作用 (l'action à distance) は、思想史上、古代以来否定されてきた。プラトンは「琥珀や磁石がものを引き付けるというあの不思議な現象にしても、決して〈引力〉は存在しない」(『ティマイオス』80C) とし、アリストテレスは「場所的に運動を引き起こすものは、動かされるものに接触しているか連続しているかでなければならない」(『自然学』VII-1, 242b59) と説いた。遠隔作用の否定は17世紀のギルバート (William Gilbert [or Gylberde], 1544-1603) にまでいたる。だが、ギルバートにおいて、自説の例外が磁石の作用であった。「磁石はただたんに或る距離をへだてて磁性体を刺激する」<sup>40)</sup>。そして実はギルバート以前から、プラトン以来の近接作用 (l'action de contact) のみを認める正統的な知の流れの伏流に、遠隔作用を認める魔術的な知の系譜があった<sup>41)</sup>。その代表はルネサンス期の医師、さきに一瞥したパラケルススで、彼とその一派は武器軟膏 (l'onguent armaire ou l'onguent des armes) なる

ものを主張した。これは別名、磁気医術 (la médecine magnétique ou la guérison magnétique) と呼ばれ、創傷の手当てをするとき、傷ではなく、その傷をつくった武器に軟膏を塗るというもので、怪我人と武器との間はいかに離れていてもよいとされた<sup>42)</sup>。さきに論じたブラウニングの詩『メスメリズム』で催眠術師が遠方の女を幻視し、さらには遠隔操作で彼女を呼び寄せるという筋立てには、メスメリズムの淵源としての武器軟膏が遠く反響しているのである。プラトン以来の否定にもかかわらず、人々は磁石の作用を媒介なしに生ずる不思議な遠隔作用だと捉え、それは思想史の地下水脈に異端の知として存在しつづけてきた。メスメリズムはこの異端の医説の正統な嫡子である。そして、その象徴的表象は「磁気」(le magnétisme) であった。

「磁気」という表象による治療術であるメスメリズムは、遠隔作用としてとらえるにせよ、近接作用としてとらえるにせよ、まさにルイ16世の調査委員会が結論付けたように、想像的な実体による自然哲学や治療術と類縁関係をもつ。

メスメルが1770年代の半ばに〈動物磁気〉を発見したのとほぼ時を同じくして、イタリアのガルヴァーニ (Luigi Galvani, 1737-1798) は解剖したカエルの足に金属に触れさせることで生じる痙攣現象を観察し、〈動物電気〉(l'elettricità animale; il galvanismo) の概念を提唱している。概念の内実には重要な差異があるとはいえ、生物が特有の流体をもっている点で共通している動物磁気説と動物電気説は、しばしば混同されつつロマン派文学や自然哲学の重要な靈感源となる。たとえば、ノヴァーリス (Novalis, 1772-1801) には次のような断章がある。「われわれの思考は、まさにガルヴァーニ電気の発生そのもの [...]」<sup>43)</sup>。

#### E フランクリンと「調和」という名の楽器

メスメリズムをめぐる人物相関研究にとって、さらに重要なのは米国の科学者・政治家フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) である。避雷針の発明者として知られるフランクリンとメスメルのあいだには、いくつかの接点がある。メスメルは治療に際して、アルモニカ (Eng. Armonica [glass armonica, glass harmonica], Fr. Armonica [armonica de verre, glassarmonica], It. Armonica [armonica a bicchieri]) と呼ばれる奇妙な楽器を演奏した [図4]。彼によれば、〈磁化〉したアルモニカの音色を聞かせることも治療の一環であった。そして、この楽器を発明したのがフランクリンである。もともと水を入れたグラスの縁を濡らした指でこすつ



て楽器として利用するアイディア自体は古くからあり、ガリレオ（Galileo Galilei, 1564-1642）は1638年の時点で今日いわゆるグラス・ハーブのような楽器の構想を記述している<sup>44)</sup>。これを改良し、水に浸かりながら回転するガラス円錐体に手を当てることで音色を奏でる楽器として改良したのがアルモニカであった。アルモニカはヨーロッパの音楽界で熱狂的に受け入れられた。先述のようにメスメルと親交のあったモーツァルトは、『アルモニカ、フルート、オーボエ、ヴァイオリン、チェロのためのアダージョとロンド』（*Adagio e Rondò in do min per glassarmonica, flauto, oboe, viola e violoncello*, K.617）や『アルモニカのためのアダージョ』（*Adagio für Harmonika*, K.356）といった作品を残している。そして、もともとヴァイオリンやクラヴサンを演奏する音楽愛好者であり、身体の磁気の調和を回復することが病気の治療であると考え調和協会を組織したメスメルにとっても、神秘的な音色を発するこの「アルモニカ」という名の楽器は魅力的であったのだろう。もともと発明者のフランクリン自身、リチャード・ブラウン『音楽療法』（1727年）<sup>45)</sup>という書物を読んでおり、この楽器が音楽療法に有効であると考えていた。この楽器をメスメルは1760年代後半に知り、いち早く治療に取り入れた。なお、興味深いことに、この楽器は演奏者や聴衆に狂気を引き起こすという噂があった。アルモニカの高音で風変わりな音色は女性が聴くと衰弱し、若者が聴くと死に至ることさえあるとか、演奏者がガラス円錐体から伝わる振動で神経を病むといった批判がなされたという<sup>46)</sup>。

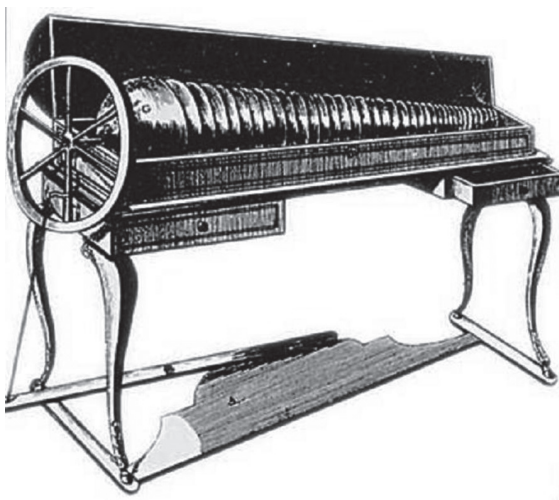


図4 アルモニカ（18世紀の図版）

また、雷雨のなか嵐をあげ、空から導線によって導いた〈雷〉をライデン瓶に蓄電し、その正体が電気であることをフランクリンが証明したことはつとに知られているが、彼は神経疾患を〈電気〉によって治療しようと試みていたことも今日に伝わる<sup>47)</sup>。これはメスメルが〈磁気〉による治療を試みたのとはほぼ時代を同じくする。文学史的には、天の焰たる雷を御するフランクリンは、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）をはじめとするテキストのなかで、天から〈電気火花〉という焰を盗んだプロメテウスになぞらえられる。そこには、宇宙から〈磁気流体〉を地上に導き、それを自在に操ったメスメルの姿も重なる。

### 3 メスメリズムの消息

#### A ヴィルヘルム・ライヒ

西欧におけるメスメリズムは19世紀後半には、治療実践としても、文化史的事象としても、その命脈が尽きるとみてよい。だが、動物磁気のような仮想的流体は歴史の地下水脈を流れ続ける。そして、それが再び地上に現れる様を、われわれは20世紀オーストリア・米国の精神分析家ヴィルヘルム・ライヒ（Wilhelm Reich, 1897-1957）の生体エネルギー論に見出す。ふたたびエランベルジェによれば、メスメリズムはピュイゼギュールの磁気睡眠、そしてナンシー学派やサルペトリエール学派といった一九世紀の精神医学者たちの業績を経て、力動精神医学（la psychiatrie dynamique）、つまり事実上フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の精神分析学へと繋がる<sup>48)</sup>。単純化すれば、エランベルジェは〈メスメル―フロイト〉を一直線に結ぶラインを描いている。だが彼は、メスメルからライヒというラインを重視しない。むしろエランベルジェはフロイトの弟子であるライヒに対し、フロイト流の精神分析の正統な継承という点で否定的であり、〈フロイト／ライヒ〉間に断絶をみる<sup>49)</sup>。したがってエランベルジェの記述において、メスメル―フロイトの連続、フロイト／ライヒの断絶、という前提から、メスメルとライヒの積極的な接続は帰結しない。むしろそれはエランベルジェが〈無意識の発見〉という観点で記述しているためであり、彼のヒストリオグラフィの瑕疵ではない。ここでわれわれが〈仮想的流体〉の表象という観点でメスメルとライヒを見るならば、両者は一直線の上にならぶことが明らかになるだろう。ライヒは通例、その前期思想が、フロイト流の古典的精神分析を今日的な自我心理学へと展開す

るものとして理解され、社会思想史の文脈では性的欲望をめぐる精神分析理論をマルクス主義に統合し〈性の解放〉によって社会や文化の変革をなしとげようとする革命思想あるいはファシズム批判の思想として評価される。だが彼の後期思想は、オルゴン (Orgone) なる概念を中心とする生体エネルギー理論である。彼はこの理論を展開し、独自の代替的医術を実践したため、晩年は投獄され、獄中に没している。ライヒによれば、オルゴンエネルギー (Orgonenergie) はフロイトのリビドーのような理論上のものではなく、実際に自然科学的方法で観測・定量が可能なものであり、心理的過程ではなく生物学的現象によって生じ、ある種の集積装置によって蓄積可能であり、蓄積したオルゴンエネルギーは心身の疾患の治療に利用可能であり、空に向かって放てば気象を変化させることさえできるといふ<sup>50)</sup>。オルゴンが実体的なエネルギーであるとライヒが主張することをみれば、そこにメスメリズムの遠い反響を認めることは容易である。ここに浮かび上がるのは、メスメル—(フロイト)—ライヒ、つまり動物磁気—(リビドー)—オルゴンという仮想的流体概念の歴史である。メスメルが紆余曲折を経てフロイトの精神分析の淵源となったとすれば、フロイトの学説は再び奇妙な曲がり道を経てライヒのオルゴンエネルギー論 (Organomie) というメスメル的なものに逢着したとみることができであろう。メスメルと同じくドイツ語圏に生まれ、メスメリズムがフランス大革命につながる政治的急進思想を育んだように、〈性の革命〉による社会変革を標榜したライヒが、独自の生体エネルギー論を唱え、それを医術としても応用しようとし、結果、不遇な晩年を送ったことはメスメルの生涯を想起させずにおかない。

## B 日本のメスメリズム

最後に、我が国とメスメリズムの接点を一瞥しておこう。日本にメスメリズムが初めて紹介された時期を正確に特定することは難しい。さしあたり1873年(明治6年)に刊行された英和辞典、柴田昌吉・子安峻編『附音插图 英和字彙』(日就社)に Mesmerism の項目があり「動物磁石力[sic.]」<sup>51)</sup>と訳されているあたりが初出と考えられる。メスメルの訳書としては、1885年(明治18年)に鈴木万次郎なる人物の訳述で『動物電気概論[sic.]』(十字屋)というメスメル著作の抄訳が刊行されている<sup>52)</sup>。この訳書は1887年(明治20年)前後の日本における催眠術ブーム<sup>53)</sup>、あるいは1910-11年(明治43-44年)頃の心霊術流行<sup>54)</sup>に寄与し

た可能性が高い。大正から昭和初期に活躍した霊術家・松本道別(1872?-1941)は1921年(大正10年)の時点で『人體ラヂウム療法講義 第壹冊』(人體ラヂウム學會本部)においてメスメリズムに言及している<sup>55)</sup>。田邊信太郎は松本の主著『霊学講座』(全4巻、1927-28年[昭和2-3年])に述べられている「人体ラヂウム」あるいは「人体放射能」なる説に触れ、「松本道別は、生命の原動力、精神の作用、自然療能力を人体放射線と呼び、プラナーナ、気、動物磁気、電子等の異称の〈実体〉であるとした」と述べている<sup>56)</sup>。実際、『霊学講座』の第三冊「学理篇」を読むと、松本にあってメスメリズムは単なる暗示による催眠術として機能概念的に捉えられているというより、かなり実体概念寄りに理解されているように見える。メスメリズムは我が国でも催眠術とする機能論的な理解があった一方で、メスメルその人のように実体としてとらえた者もあった<sup>57)</sup>。日本のメスメリズム受容史については、さらなる調査研究が俟たれよう。

## 結びにかえて

ひとつの日本映画作品を想起しつつ、本稿を結びたい。1997年に公開された黒沢清(1955-)の監督になる映画『CURE』である[図5]。洗脳あるいは催眠によって他人を操り殺人を犯させるという奇怪な事件が発生した。犯人・間宮邦彦の部屋を家宅捜索する刑事が目にしたのは大量の心理学・精神医学文献、そして机の上に置かれたメスメルに関する数冊の書物と「動物磁気とその心理効果についての考察」と題された間宮の手書きの論攷であった。オウム真理教事件(1995年)に想を得たこの映画では、〈洗脳〉や〈催眠〉のテーマが展開される。そのタイトルが〈治療〉<sup>キュア</sup>であり、犯人が着想を得たのがメスメリズムであったこ



図5 映画『CURE』より 間宮の手稿

とをわれわれはどう読み解いたらよいだろう。<sup>リュミエール</sup>啓蒙の世紀の理性がみた夢がメスメリズムであったとしたら、20世紀末のみた悪夢が、科学技術省なる組織をもち、実際に科学的手段を宗教実践のなかに取り込んだ果てに、科学がふたたび魔術と化し、信者をその科学的神秘主義／神秘的科学主義と呼ぶべきヴィジョンによって催眠<sup>メスメリイズ</sup>にかけ、救済という名の殺人をおこなった教祖の姿がやはりそこにはあるのか。それとも、その後2000年代に隆盛する〈癒し〉ブームへの予兆がメスメリズム的なものとして不気味に映し出されているのだろうか。

## 注

- 1) Mesmer, *Mémoire sur la découverte du magnétisme animal*, Genève et Paris, P. Fr. Didot le jeune, 1779, pp.74-85. メスマー「動物磁気発見のいきさつ」(本間邦雄訳), 『キリスト教神秘主義著作集』, 第16巻, 教文館, 1993年, 316-319頁。
- 2) Hegel, *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften*, 1830. ヘーゲル『精神哲学』(船山信一訳), 上巻, 岩波文庫, 1965年, 248頁。
- 3) Zweig, *Die Heilung durch den Geist*, 1931. ツヴァイク『精神による治療』(佐々木斐夫・高橋義夫・中山誠訳), ツヴァイク全集, 第12巻, みすず書房, 1973年, 57頁。引用部分は高橋義夫の訳。
- 4) さらに、彼は自説の用語をグコレニウス(Rudolf Goclenius der Jüngere, 1572-1621)や17世紀スコットランド学派の学者たちなどにも負っている。Henri Ellenberger, *The Discovery of the Unconscious*, New York: Basic Books, 1970. エレンベルガー(エランベルジェ)『無意識の発見』(木村敏・中井久夫監訳), 上巻, 1980年, 76-77頁を参照。
- 5) 近代の引力理論に繋がるケプラーやニュートンの学説を神秘的牽引力概念として数えることには違和感があるかもしれない。しかしケプラーの著作『宇宙の調和』に見られるように彼の宇宙論には新プラトン主義的な調和の美意識に裏付けられた神秘的なものであり、ニュートンの万有引力にしてもヤーコブ・ベーム(Jakob Böhme, 1575-1624)などの神秘思想に着想源をもつ神秘的な力の概念であった。たとえば次の文献を参照。Hélène Metzger, *Attraction universelle et religion naturelle chez quelques commentateurs anglais de Newton*, Paris, Hermann, 1938, 2<sup>ème</sup> partie, Section III, 拙稿「重力の観念史」, 『哲学』第129集, 三田哲学会, 2012年3月, 43-72頁。
- 6) エレンベルガー, 前掲書, 上巻76頁。
- 7) エレンベルガー, 前掲書, 上巻67頁。
- 8) Voltaire, *Lettres philosophiques ou Lettres anglaises*, 1734. Cf. ヴォルテール『哲学書簡』(林達夫訳), 岩波文庫, 1953年。
- 9) Robert Darnton, *Mesmerism and the End of the Enlightenment*, Cambridge [Mass.], Harvard UP, 1968. ダントントン『パリのメスマー』(稲生永訳), 平凡社, 1987年, 20-21頁。
- 10) ダントントン, 前掲書, 14頁。
- 11) エレンベルガー, 前掲書, 上巻76頁。
- 12) 彼はその後、ヴィーンを経てスイスの小村に居住し, 1815年3月5日に没するまで, 静かな余生を送った。
- 13) メスメリズムの背景をなす「微細な流体」(les fluides subtiles)あるいは「不可秤量流体」(les fluides impondérables)と人体の関係については、次の論攷がきわめて重要である。吉永進一「『電氣的』身体——精妙な流体概念について」, 『舞鶴工業高等専門学校紀要』, 第31号, 1996年3月, 113-120頁。不可秤量流体の概念史については, Hélène Metzger, *Newton, Stahl, Boerhaave et la doctrine chimique*, Paris, F. Alcan, 1930, 島尾永康『物質理論の探究』, 岩波新書, 1976年を参照。
- 14) フィオルディリージとドラベッラという姉妹の恋人である二人の男グリエルモとフェルランドが, それぞれの相手の貞節を試すため, 互いの相手を口説いたら, 二人とも心変わりしてしまうという物語。
- 15) Wolfgang Amadeus Mozarts Werke, Serie V, Opem, Nr.19, "Cosi fan tutte", K.588, Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1881, Atto Primo, Scena XVI, pp.158-159. なお作詞者はロレンツォ・ダ・ポンテ(Lorenzo da Ponte, 1749-1838)。
- 16) ダントントン, 前掲書, 51頁。
- 17) *Ceuvres complètes de H. de Balzac, II*, Paris, A. Houssiaux, 1855, vol. II, p.362. Cf. バルザック「ことづけ」, 『知られざる傑作 他五篇』(水野亮訳), 岩波文庫, 1928年。
- 18) P. B. Shelley, *Prometheus Unbound*, 1820, Act IV. Cf. シェリー『鎖を解かれたプロメテウス』(石川重俊訳), 岩波文庫, 1982年。
- 19) Maria Tatar, *Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature*, Princeton [N.J.], Princeton UP, 1978. 鈴木晶訳, 国書刊行会, 1994年。ほかに、バルザックにおけるメスメリズムについて多く紙幅を割いた研究書としてErnst Robert Curtius, *Balzac, Zweite Auflage*, Bern, A. Francke AG Verlag, 1951〔クルティウス『バルザック論』(大矢タカヤス監修, 小竹澄栄訳), みすず書房, 1990年〕があり、ホーソーンを中心とする文学を材料に米国におけるメスメリズムをジェンダー的な視点を交えて分析した重要な論攷として庄司宏子「メスメリズムと女性の神経症的身体」(成蹊大学文学部学会編『病と文化』, 風間書房, 2005年, 103-135頁)がある。
- 20) Th. Gautier, *Gemma: ballet en deux actes et cinq tableaux*, Paris, Michel Lévy frères, 1854, 閲覧はフランス国立図書館(BnF)のGallicaによる。http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5546004t なお平林正司『十九世紀フランス・バレエの台本』, 慶應義塾大学出版会, 2000年, 第9章には、本作品のきわめて優れた全訳が収録され、丁寧な解説・註が付されている。本稿における訳文は基本的に同書の訳に依り、一部訳語を文脈の都合上、改変させていた。また原綴を附記した箇所がある。訳者・書肆に御礼と御詫びを申し上げる。
- 21) Gautier, *op. cit.*, n.p. 平林, 前掲書, 173頁。
- 22) Gautier, *op. cit.*, p.6. 平林, 前掲書, 174頁。
- 23) *Ibid.* 平林, 前掲書, 174-175頁。
- 24) Gautier, *op. cit.*, p.7. 平林, 前掲書, 175頁。
- 25) *Ibid.* 平林, 前掲書, 同頁。
- 26) Gautier, *op. cit.*, p.8. 平林, 前掲書, 175-176頁。強調は引用者による。
- 27) Gautier, *op. cit.*, pp.8-9. 平林, 前掲書, 176頁。強調は引用者による。
- 28) Gautier, *op. cit.*, p.9. 平林, 前掲書, 177頁。
- 29) *Ibid.* 平林, 前掲書, 同頁。強調は引用者による。



- 30) Gautier, *op. cit.*, p.11. 平林, 前掲書, 178頁。強調は引用者による。
  - 31) Gautier, *op. cit.*, p.12. 平林, 前掲書, 179頁。
  - 32) Diderot et d'Alembert éds., *L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, 28 vols., Paris, 1751-1772.
  - 33) G. H. von Schubert, *Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft*, 1808. Karben, Wald, 1997.
  - 34) 庄司, 前掲論文, 117頁。
  - 35) たとえば, 「眠る女」(*The Sleeper*) には次のような一節がある。  
「すべての〈美しいもの〉は眠る! ——見よここに／アイリーンは横たわる, 彼女の〈運命〉と共に!」(福永武彦訳, 『ボオ 詩と詩論』, 創元推理文庫, 1979年, 91頁)。
  - 36) Laura Otis ed., *Literature and Science in the Nineteenth Century: An Anthology*, Oxford [Eng.], Oxford UP, 2002, pp.415-419. 以下の引用では, 連の番号を訳文末尾に〔漢数字〕で示す。
  - 37) この極めて晦渋な詩の解説・訳出にあたっては, 次の論攷を参考にした。Jerome M. Schneek, "Robert Browning and Mesmerism", *Bulletin of the Medical Library Association*, 44 (4), Oct. 1956, pp.443-451.
  - 38) その他, ホフマン『胡桃割り人形と鼠の王』(E.T.A.Hoffmann, *Nußknacker und Mausekönig*, 1816), ボオ『ウィリアム・ウィルソン』(E.A.Poe, *William Wilson*, 1839), ドストエフスキー『分身』(Dostoievski, *Le Double* [ДВОЙНИК], 1846) など, 枚挙にいとまがない。
  - 39) たとえば, フュースリー『マクベス夫人の夢中歩行』(Johann Heinrich Füssli, *Die schlafwandelnde Lady Macbeth*, 1781-1784), ロッセ＝グランジェ『夢遊病の女』(Édouard Rosset-Granger, *La Somnambule*, 1897)。
  - 40) 山本義隆『磁力と重力の発見』, 第3巻, みすず書房, 2003年, 646-647頁。
  - 41) 実際には遠隔作用をめぐる概念史はかなり複雑で, ごく大雑把に言えば, 古来否定されてきたこの概念が, 中世からルネサンス期にかけて「隠れた性質」(la qualité occulte)という観念を背景に, トマス・アクィナスやパラケルススなどによって認められ, さらにケプラーらによって近代的な引力概念として肯定されるが, ニュートンによって万有引力とエーテルの概念によって, きわめて曖昧な身分を与えられる。そして一九世紀以降, 空間のいわば緊張状態を意味する「場」の概念によってふたたび否定されるという経緯をたどる。詳しくは以下の文献を参照。山本義隆『磁力と重力の発見』(全3巻, みすず書房, 2003年), Max Jammer, *Concepts of Force: A Study in the Foundations of Dynamics*, Cambridge [Mass.], Harvard UP, 1957 [ヤンマー『力の概念』(高橋毅・大槻義彦訳), 講談社, 1979年], Mary Hesse, *Forces and Fields: The Concept of Action at a Distance in the History*, London, Nelson, 1961 (Mineola [N.Y.], Dover Publications, 1999)。
  - 42) 武器軟膏については次の論攷を参照。Carlos Ziller-Camenietzki, « La poudre de Madame: la trajectoire de la guérison magnétique des blessures en France », *Dix-septième siècle*, 2001-2, n° 211, pp. 285-305.
  - 43) ノヴァーリス『一般草稿集一七八九一九九年』(青木誠之ほか訳), ノヴァーリス全集, 第2巻, 沖積舎, 2001年, 176頁。
  - 44) Stanley Finger, *Doctor Franklin's Medicine*, Philadelphia, U of Pennsylvania P, 2006, p.236. 以下, メスメルとアルモニカについては, 本書Ch.14の記述に多くを負う。
  - 45) Richard Browne, *Medicina Musica, or A Mechanical Essay on the Effects of Singing, Musick [sic.], and Dancing, on Human Bodies*, London, Cooke, 1727.
  - 46) Finger, *op.cit.*, pp.244-247.
  - 47) Stanley Finger, 'Benjamin Franklin and the Electrical Cure for Disorders of the Nervous System', in *Brain, Mind and Medicine*, Ed. by Harry Whitaker et al., New York, Springer, 2007.
  - 48) エレンベルガー, 前掲書, 上下巻全篇。
  - 49) 同書, 下巻, 515頁。
  - 50) ライヒについてはWilhelm Reich, *Selected Writings*, New York, Farrar, Straus and Giroux, 1960を通読すれば, 我が国ではほとんど訳出紹介されていない後期思想(つまり神秘的な生体エネルギー論を主張するようになってからの思想)を知ることができる。また, 次の論攷で詳述してあるので参照されたい。拙稿「生体放射の歴史——グールヴィチとライヒ」, 『生物学史研究』, 第87号(特集・放射線の生物学史), 53-59頁, 2012年9月
  - 51) 国立国会図書館蔵本, YDM83012. 同図書館近代デジタルライブラリーにより閲覧。http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870052/359, 706頁。
  - 52) 国立国会図書館蔵本, 請求記号YDM57606. 同図書館近代デジタルライブラリーにより閲覧。http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832836 この蔵本には表紙・奥付にメスマー(メスメル)著などの文字はない。本文からメスメルの著作であることはほぼ明らかだが, 正確な底本は不明。恐らくは英語からの重訳である。なお, この書物には異本があるようで, 表紙に「獨大醫メスマー氏著, 日本鈴木万次郎訳述」と書かれ, 『動物電氣論』という微妙に異なる書名の版本(明治18年, 十字屋)があることを由良君美が自らの蔵書を書影入りで紹介している。由良君美「メスメリズム断想」, 『みみずく偏書記』, 青土社, 1983年所収を参照。
  - 53) 一柳廣孝『催眠術の日本近代』, 青弓社, 1997年を参照。
  - 54) 東大助教授・福来友吉(1869-1952)の念写や千里眼の実験はよく知られている。一柳廣孝『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉』, 講談社, 1994年などを参照。
  - 55) 国立国会図書館蔵本, YD5-H-特104-300. 同図書館近代デジタルライブラリーにより閲覧。http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/909396, 14頁。
  - 56) 田邊信太郎『病いと社会』, 高文堂出版社, 1989年, 八九頁。また, 島蘭進『〈癒す知〉の系譜』, 吉川弘文館, 2003年, 33-36頁をも参照。
  - 57) ここで実体概念／機能概念(あるいは実体論／機能論)という二項で捉えているのは, Ernst Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, Berlin, B.Cassirer, 1910 [カッシーラー『実体概念と関数概念』(山本義隆訳), みすず書房, 1979年)の分析枠組に基づいている。
- \* 本稿は2011年11月12日に東京大学駒場キャンパスで開催された表象文化論学会第6回研究集会における報告「メスメリズムという文化」の草稿, 2014年7月2日に東京大学大学院教育学研究科で行なわれた基礎教育学コース総合演習での報告「遠隔作用論——離れたものの間に働く力について」の草稿をもと

にしている。両会合にてフロアからご意見をくださった方々に御礼申し上げます。本稿は科研費（課題番号10J05482）による研究成果の一部である。

（指導教員 金森修教授）